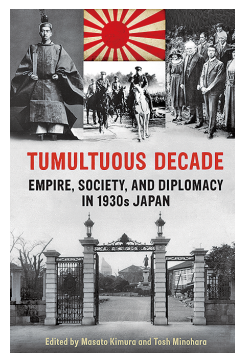


木村正人・襲原俊洋編

『激動の十年——一九三〇年代日本の帝国・社会・外交』

Masato Kimura and Tosh Minohara, eds. *Tumultuous Decade: Empire, Society, and Diplomacy in 1930s Japan*. University of Toronto Press, 2013

ジェイソン・モーガン(朝倉和子訳)



本書 *Tumultuous Decade* は、日本にとつてまさしく激動の十年だった一九三〇年代の歴史についてだけでなく、もつと広く、どの時代の歴史研究にも通じる大胆な再考である。序文で入江昭が言うように、本書は「アジア太平洋地区という広域圏で、日本がみずからのアイデンティティーと目的をどう定義してきたか、また同時に、日本および日本と他の諸国との相互作用によってグローバル社会がいかに形づくられたかを探る野心的な新シリーズ『日本とグローバル社会』(vii頁)の一環である。「歴史を国家という枠組みから救い出す」この企画は、「地域、宗教、文明などの非国家的実体」(viii頁)までも包括する今日的なトランスナショナルリズムにとどまらない。この「ハイパー・トランスナショナルリズム」は

また、本書の出版がいわば「衛兵交替」的な役割を担うことを告知するものでもある——つまり編者たちは、史学界における「ポストモダンリズムの波」を押し戻し、アメリカ学界の枠を超えて、太平洋対岸の同僚たちと共同作業をしようとした。本書に寄稿した十一名の歴史家たちは、理論的なトーンを控えめに抑え、標準的な叙述を問い直しつつも、歴史家を歴史家たらしめるホールマークである厳格な調査と、学者としての客観的姿勢を崩すことなく、繰り返し原典に戻り、日本の近代史で最も難しい時期の一つであるこの時代を、時として根源的に概念化し直した。これは讃えられるべき快挙だ。大きなゴールを定め、かつみごとな成功を取めた書物である。

本書は三部に分かれる。第一部「経済、文化、社会、アイデンティティー」には、財界、「国際文化振興会」、汎イスラム主義と比較した汎アジア主義、一九四〇年の「国民優生法」について、刺激的な研究が収められている。第二部「帝国、そして皇国の懸案」は三つの論文からなる。一つは植民地台湾での社会事業、次に戦時下朝鮮の戦争協力と葛藤、そして最後に気鋭の新人、藤岡由香氏のアメリカ日系移民による広報・世論外交についての研究がおもしろい。第三部「上層外交と政治家」には、私が本書の中でも最も注目したい論文がいくつか収録されている。内田康哉と国際連盟脱退後のその外交政策について、新たな、そして広範な見直しを含む研究、松岡洋右の外交的「賭け」、海軍大将豊田貞次郎の安全保障政策、そして対米戦争へと突き進む運命的な意思決定において東郷茂徳の果たした役割が語られる。

全編を通じて優れた本書だが、字数の関係上、この三部からそれぞれ一つの論文しか紹介できない。第一部第三章ケミル・アドウンの「汎イスラム主義の鏡を通じて見る日本の汎アジア主義」は、日本の汎アジア主義を一九三〇年代の「世界秩序の《もうひとつの》ビジョン」(四四頁)への模索と位置づける。アドウンによれば、一九二〇年代にはこういう日本観は「不適切」であった。第一次世界大戦後の日本の外交政策を牽引した国際協調主義的信念と真つ向から対立するからである。しかし実のところ、それよ

り四十年前の日本には過剰なまでの汎アジア主義があふれていた。初期の汎アジア主義者は(そして汎イスラム主義者も)、文明と啓蒙というヨーロッパ的野望にほぼ賛同していたからだ——それが非ヨーロッパ世界にも拡大されることが彼らの素朴な望みだった。岡倉天心やラビンドラナート・タゴールなど東洋の最も情熱的な汎アジア主義の遊撃手たちを触発したのは、西洋人自身によるヨーロッパの優越という浪漫的な議論だったことを忘れてはならない。ところが、比較文明の言説が人種に基づく陰險な格付けへと変貌していくにつれ、国際協調主義は孤立、そして大統合への蠕動を伴うようになる。たとえば、南満洲鉄道社長の後藤新平は一九〇七年に「アジアのためのアジア」を唱え、朝鮮統監伊藤博文に日本と中国を統合したいと述べている。これに対し伊藤は、日本を西欧の同盟諸国から遠ざけないためにも、そのような言葉は使うなと警告した。日英の協力関係が優勢だったうちは、汎アジア主義は軽視されていた。だが、主として一九三一年の日本の満洲侵略以後、日本の世界秩序への関与が破綻し始めると、汎アジア主義は日本の地域関与への《もうひとつの》ビジョンを正当化する美辞麗句として新たな力を帯びるようになる。オスマントルコの知識人もまた、文明の相互作用への関与という立場を捨て、より厳格な汎イスラム主義的対抗勢力へと転換していったが、その理由は日本とほぼ同じだった。第二次世界大戦が終わると、汎

アジア主義者も汎イスラム主義者も同じようにスケープゴートにされ、かつて優勢だった見解が、以前それにおおつぴらに同調していた知識人自身によつて弾劾されることになる。この修正主義の強い潮流が、十九世紀末から二十世紀の汎××主義運動に対する私たちの見解を左右している、とアドゥンは言う。

第二部、藤岡由香の「思想戦争——アメリカの日系移民による広報・世論外交」は、第二次世界大戦以前のアメリカの移民「一世」および「日系人」問題について、注目すべき新たな洞察を展開する。この論文では、日系移民を排斥したアメリカの一九二四年移民法など、よく知られた題材を、北米の日系移民を巻き込んだ日本外務省の大きな戦略を視野に入れて、新たな弁証法へとよみがえらせる。藤岡によれば、日本外務省はアメリカの大陸膨張政策、アメリカ国内の移民と排斥という内政問題、「一世」と「日系人」の利害、そして特に日本の満洲侵略後の、また一九三七年以降に盛り上がった日本の反中国感情の中で優勢に立った中国外交との間に微妙なバランスを取ろうとしていた。しかし、アメリカ政治が反日に転じたため、日本はその外交慣例を見直さざるを得なくなつた。「広報・世論外交が（外務省の）武器庫に加わつた時が、日本の外交政策の転換点だつた」（一六三頁）のである。皮肉にもアメリカ在住の日本人の声はあまりにも日本寄りで、外務省がいささか戸惑つたほどである。だが、彼ら日本人のアメリカ

の社会や政治への関与の余地がいよいよ狭まつていく事態に直面して、その日本寄りの姿勢はかえつて強まつた。投票箱の代わりに日本外務省が彼らの選択肢となつた——自分たちの住む国（アメリカ）の政策に、いかに間接的であれ、影響力を行使するための手段になつたのである。藤岡のこの新解釈は、一九九六年にFBIがこの時期に関するおびただしい量の文献を廃棄したことを思えば、なおさら評価されるべきである。アメリカ日系人会（JAA）はいまだにその文書庫を公開していない。また日系アメリカ人が強制収容された時点でやはり多くの重要な記録が失われたし、真珠湾攻撃のあと、後難を恐れた「一世」や「日系人」の手で、親日の証拠となる多くの資料が破棄された。戦時賠償が求められている今、生存している「一世」や「日系人」はかつての自分たちの親日姿勢を認めたくない。ルーズヴェルト大統領の日系人収容政策に対するアメリカからの謝罪のチャンスを逸しはしないかと恐れるからだ。こうした背景すべてが、一九三〇年代アメリカの日系移民についての歴史研究を困難なものにしている。

最後の第三部は、私としては一部・二部をしのご最強の部分だと考えるが、さて、どの論文を取り上げたものか。ラスティン・ゲイツの「一九三〇年代初頭の明治外交——内田康哉、満洲、国際連盟脱退後の外交政策」は、複数の文書庫をまたぐ学術研究の完璧な一例である（そもそも本書全体がそういう姿勢を土台としてい

る)。内田康哉は日本の満洲侵略後、鮮やかに右旋回してみせた政治家として知られることが多い。だがゲイツの見解では、内田は本質的に明治の外交官であり、満洲国における日本の地位を保つことによつて、個々の西欧列強とバイラテラルな関係を育てようとした。ゲイツは内田の外交、とりわけ満洲危機（一九三一―三三三）における外交を、「昭和軍国主義の最初ののろしというよりは、明治帝国主義の最後のあがき」（二九〇頁）にとらえる。明治初期以来ずっと、帝国主義列強の一員に加わり、それと同等と見なされることを目標とし続けた「霞が関正統外交」の偉大なる一貫性を論じた内山正熊と同一の見解である。内田康哉の名高い「焦土」発言について、ゲイツは慎重に選び抜いた言葉によつて、その外交的、政治的文脈をみごとに再構築してみせる。この「焦土」という言葉は実のところ、西欧の外交官やジャーナリストに好意あるいは無関心をもつて迎えられた（当時のジャパンウォッチャーだったヒュー・バイアスはこれをベタ誉めしている）。一方、この発言が主なターゲットとしたのはおそらく、シベリアへの膨張をめぐつてソ連と直接対峙したがる日本軍部の一部だったと思われる。このように内田は外交における卓越した知的現実主義者、明治外交の達人であり続けた。ゲイツのこの論文は、歴史的叙述の中で皮相な扱いしかされてこなかった問題の人物についてのみごとな批判的見直しである。

本書の守備範囲があまりに広いため、これを学部生や院生に読ませるのをためらう教授もいるだろう。ここに収録された論文は複数の分野をまたいで書かれているため、どこに分類してよいか迷うこともあるだろう。実はこれこそが肝心な点だと思う。たとえ分類は難しくとも、外交、法律、植民地主義、精神文化史、帝国、ビジネスや制度の歴史、二十世紀東アジア史一般などの分野にとつて、ひとつ一つの論文が充分に補完してくれるはずだ。本書は学術書として比類なき良質の歴史書であり、著者たちの今後の仕事に心から期待したい。

* 本稿は、*Japan Review* No. 27 (2014) に掲載された英文テキストの日本語訳である。